

障害がある人もない人も楽しめる場を増やす

体を動かせば楽しい、もうそれはスポーツです

トップアスリートがものすごいパフォーマンスをすることは見ればわかります。でも彼らだけがスポーツマンかというところ、それは違います。体を動かし楽しいと感じる——もうそれだけでその人はスポーツマン。自由に、やりたいことをやる。これがスポーツの根本原則！

日本体育大学スポーツマネジ
メント学部特任教授 (22年3月退任)

野村一路

●のむら・いちろ 1954年東京生まれ。日本体育大学大学院体育学研究科社会体育学コース修士課程修了。専門は生涯スポーツ、パラスポーツ、レジャー・レクリエーション。文科省委託事業「健常者と障害者のスポーツ・レクリエーション活動連携推進事業」協力者会議座長などを歴任。

スポーツは健康男性のものだった!?

——スポーツというと、競争・競技、体育会系向上心を思い浮かべます。

今、日本で認識されている「スポーツ」は、スポーツ全体のごく一部にすぎないんですね。日本人に「スポーツをやりましょう」と誘うと、しばしば「苦手です」「難しそう」

という言葉が返ってきますが、なぜスポーツをすることに対して否定的な人が多いかというと、多くの人が、「競技」や学校の「部活動」をイメージするからではないでしょうか。スポーツに対して厳しい上下関係を求められる部活動のイメージを持っている人は、体を動かすことの好き嫌いに関係なく苦手意識や拒否感を持つてしまう。私はこうしたスポ

ーツの認識を変えていかないといけないと思っています。実は日本でスポーツを日常的に行っている人の割合は、欧米などのスポーツ先進国と比べて極めて低いレベルなんです。——そもそもスポーツはいつごろから始まったのでしょうか。さかのぼれば、古代ギリシャ時代からスポーツらしきものは行われていました。これが近代のスポーツに

なってきた背景には、大きく二つの流れがあったと考えられます。一つは軍事訓練のために体を鍛える、トレーニングとしてのスポーツ。もう一つは、いわゆる特権階級の人々による、ステータスとしてのスポーツです。

オリンピックでもこれらの流れの中から生まれた競技、例えば軍事訓練の手りゅう弾投げから派生した砲丸投げ、特権階級のテニスや乗馬などが行われていますから、納得してもらえらると思います。さらにいうと、この源流から生まれたスポーツは男性に限られたものでした。

こうした男性中心主義を変革しようとして、十九世紀の終わりに入ってから女性たちがスポーツへの参加を求めるようになり、この時期からスポーツ界も変わり始めました。一八九六年の第一回アテネオリンピックに

は女性の参加は認められていませんでしたが、一九〇〇年の第二回パリ大会から参加できるようになりました。

昨年の東京オリンピック・パラリンピックでようやく女性参加者が半数になりましたが、それまではずっと男性のほうが多かったですし、今も男性と女性では種目が違います。五〇キロ競歩は男性のみですね。マラソンも長く男性だけのスポーツでしたが、ある女性が男装してこっそりマラソンに参加し、完走したところで「自分は女性だ」と名乗りをあげ、女性もマラソンができることを証明したという有名な話があります。

その後、先進国を中心に長寿社会になると、今度は元気な高齢者が参加し始めます。日本ではゲートボールが高齢者の象徴的なスポーツでしたが、今は多様な競技が楽しまれて

います。続いて子どもたちが、そしてようやく障害者がスポーツに参加し始めるのです。——障害者の参加はどのような流れで進んだのですか？

一九四四年、兵士の治療と社会復帰を目的としてロンドン郊外にあるストーク・マンデビル病院内に脊髄損傷科が開設され、スポーツを取り入れた治療で成果をあげていました。そこで、一九四八年のロンドンオリンピックにあわせて、初代科長だったルートヴィヒ・グットマン卿が、十六名の車いす患者(英国退役軍人)のアーチェリー大会を開催しました。これがパラリンピックの原点といわれています。

この大会は一九五二年にオランダの参加を得て国際競技会へと発展し、第一回国際ストーク・マンデビル大会として開催されます。一九六〇年